

東京・池袋のサンシャイン国際水族館。ここにあるイワシの水槽の前で待たされた。

「知っているつもりはありますが、よく見ているうちに、こちらが当然と思っていた考えや意識をグラツと揺るがすもの、それに興味があふれます」

「一つひとつ正面から見るとはめつたにないでしょう。スパーなんかで見ると、グテツと横たわっていて、尾びれとか背びれがなんどついているんだろう、などと考えたりもしますが、泳ぐ姿を思っている、本当に無駄がなく生きていく感じがします」

「弱気と書いて鯛。魚群が魚体を銀色に光らせる。時々クワツと口を胴体の幅ほどにも開け、エサをむさぼるさまに目をひきつけられている、小熊さんは「僕は珍しい魚には関心がない」と続けた。

「知っているつもりはありますが、よく見ているうちに、こちらが当然と思っていた考えや意識をグラツと揺るがすもの、それに興味があふれます」

「知っているつもりはありますが、よく見ているうちに、こちらが当然と思っていた考えや意識をグラツと揺るがすもの、それに興味があふれます」

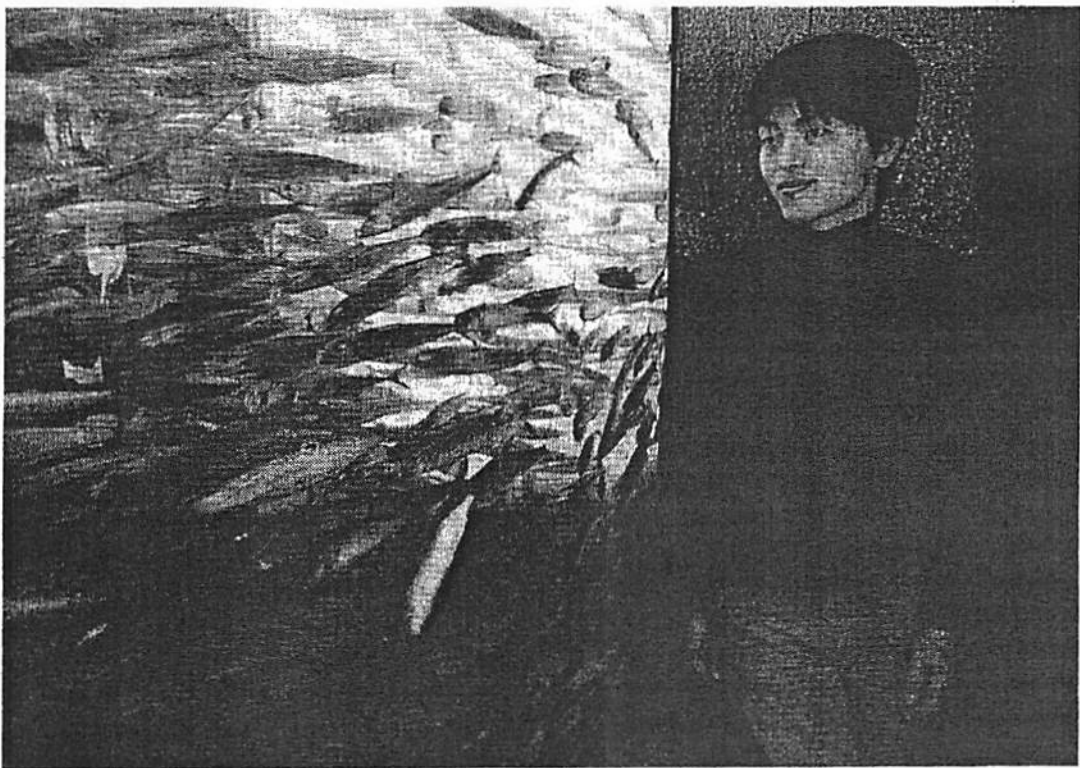
社会学者

小熊 英二さん

私のいる風景

「自分自身、戦前の日本では、他民族差別がひどく、単一民族論が支配的だと思っていただけに、むしろ戦後にそれが定着したという事実は意外でした。いかに我々が、物事を神話化してとらえているかが分かってもらえれば」と本書について語る。

「現在の地点から当時の考えの自黒はつけず、自分が彼らの立場だったらどうしたかを納得いくまで考え、史料に込められた声を伝える。優秀な媒体、であらうとす



おぐま・えいじ 1962年東京生まれ。慶応大学総合政策学部教員。東京大学農学部卒。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。共著には「ナショナルリティの脱構築」「知のモラル」などがある。

「独特の研究手法。史料は「自分が存在感を感じたものや、違和感を覚えたものを片っ端から集め、執筆の段階で初めて論理的に組み立てた」と言う。進歩派が保守派かという図式的思考とは無縁。既存の神話を揺さぶり、その裂け目から新たな思考の可能性を探る(神話を「わすれ」を大切にすると人なのだ。

「この世の秩序を知りたい」との欲求から、理論物理学に興味を持ち、大学では理学部に進んだが、三年後には農学部へ転じた。しかし、科学知識で社会を解釈することに限界を感じ、八七年に出版社に入社。雑誌編集部に配属され、学術や思想家にもまれながら社会の見方を学んだ体験が、現在の基礎を作った。

氏は「理論を言わず、裏手を発する優秀な編集者でした」と評する。

「いったんは退職したが、九七年には退社して、研究に専念。昨年、博士論文をまとめた「日本人の境界」(新編社)を出した。

「日本人」という概念は、どう使われたのか、同化政策に伴う同根と排除が、いかに多量な悲劇を生んだか。当時の言説を調べ、「当然」と思われていた日本人の像が崩れてゆく感覚を示したかった」という作品は、専門家だけではなく、池田彌樹、奥野浩二の作家にも注目された。「境界」に込められているのは、さまざまな問題を軸中の現れる場だからである。

「知っているつもりはありますが、よく見ているうちに、こちらが当然と思っていた考えや意識をグラツと揺るがすもの、それに興味があふれます」

「知っているつもりはありますが、よく見ているうちに、こちらが当然と思っていた考えや意識をグラツと揺るがすもの、それに興味があふれます」

東京・豊島区のサンシャイン国際水族館で